
冬の花

上原直也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冬の花

【Nコード】

N93070

【作者名】

上原直也

【あらすじ】

東京でフリーターをしている僕はふと一年前の冬、友人に会ったときのことを思い出す。

「冬の花」

「・・・たまに意味もなく気持ちが沈んでしまうことがあるな」

と、和華ちゃんはいくらか眼差しを伏せるようにして静かな声で言った。

「べつに何が理由ってこともないんやけどな、たまにどうしようもなく寂しくなってしまうことがあってな・・・ちょっと大袈裟かもしれないけど、生きるのがちょっと苦しいなって思ってしまうくらい・・・それでな、そういう気持ちのとき、わたしよく、暗い海の底に沈んでいくおもちゃ箱のことを考えるんよね」

和華ちゃんが僕に向かってそんな話をしたのは、もうずいぶん昔のことだ。確か僕がまだ大阪に住んでいたときのことだったと思う。

他の友人と一緒に遊ぶ約束をしていて、でも、その待ち合わせの時間までまだ少し時間があったので、僕と和華ちゃんはたまたま近くにあった小さな喫茶店に入って軽く話をした。そしてそのときに和華ちゃんが僕に向かってそんな話をはじめのだ。

どういう経緯でそんな話をすることになったのかは思い出せないのだけれど、アルバイトからの帰り道、十一月下旬の冷たい風に吹かれながら自転車を漕いでいるうちに、僕はどうしてか、和華ちゃんがそのとき僕に話してくれたことをふいに思い出した。

「わたしにお姉ちゃんがひとりいるっていう話、吉田くんにしたことってあったけ？」

と、和華ちゃんは訊いてきた。

僕はその和華ちゃんの問いに軽く首を振って答えた。

すると、彼女は僕のリアクションに軽く頷くと、「わたしには五つ年上のお姉ちゃんがおるんけどな」と、話し始めた。

「今、お姉ちゃんはデパートで販売員の仕事をしててな、結構仲も良くて、二週間に一回くらいは一緒にご飯を食べにいたりもしてるんやけど・・・でも、ずっとちっちゃい頃にな、一回だけ、めっちゃすごい喧嘩をしてしまったことがあってな」

僕はどう答えたらいいのかわからなかったので曖昧に相槌を打った。

「それでそのときな、わたしの方が年下やったし、力も弱かったから、全然お姉ちゃんに太刀打ちできなくてな・・・それがめっちゃくやしくてな・・・だから、お姉ちゃんが友達とどこかに遊びにいつてる間に、お姉ちゃんがめっちゃに大事にしておもちゃ箱を勝手に持ち出して、それを家の近くの海に投げ捨ててしまったことがあるんですよ」

「よっぽどくやしかったんだね」

と、僕は和華ちゃんの突然の告白に少し笑って言った。

「今から考えるとずいぶんひどいことをしてしまったなって思うな」と、和華ちゃんも軽く口元を綻ばせて答えた。

「それでそのあとどうなったの？」と、僕は気になって尋ねてみた。「お姉ちゃんが大事にしたものを勝手に捨てたりしたら大変なこ

とになったんじゃない？」

僕の問いに、和華ちゃんはそれまで口元に浮かべていた笑みを消すと、妙に神妙な表情になって頷いた。

「自分が大事にしてたおもちゃ箱がなくなってるのに気がついたお姉ちゃんはどうすごい剣幕で怒りだしてな・・・一体にどこに隠したんだってわたしに詰め寄ってきて。でも、わたしは知らない、どこかに自分で忘れてきたんじゃないかって言い張ってな・・・お母さんとかに泣きついたりとかして・・・お姉ちゃんに嘘を突き通してん」「そっか」と、僕は上手いコメントが思いつかなくてただ頷いた。

「・・・それでお姉ちゃんもわたしを責めるのはやめたんやけど・・・でも、そのあとお姉ちゃんはずっと何日も元気がなくてな・・・あとで聞いたんやけど、そのおもちゃ箱のなかには好きな男の子にもらったペンダントが入ってたらしくてな・・・最初はいいい気味だらけにしか思ってたかったんやけど、だんだんお姉ちゃんのことを可愛そうになってきな・・・だから、わたし探しにいつてん。自分がおもちゃ箱を捨てた海に。でも、海は深くてな、子供の力ではどうすることもできひんくてな・・・結局、お姉ちゃんのおもちゃ箱は海に沈んだままなんよね」

僕は和華ちゃんの言葉に耳を傾けながら、重い金属の箱が小さな気泡をたてながら暗い海の底に沈んでいくところを想像してみた。

「・・・それでそのときのことを、何か落ち込むことがあったりする」と、思い出してしまうな」と、和華ちゃんは弱い声で言った。「あのとき、お姉ちゃんに悪いことをしてしまったなって想って、哀しい気持ちになる」

アルバイトを終えてアパートに帰り着いたのはもう夜中の十二時過ぎだった。

僕は大阪の大学を卒業してから東京でアルバイトをしながら生活をしている。東京にはちょっとやりたいことがあってでてきた。

一人暮らしなので玄関を開けてももちろん誰もいない。部屋の暗闇と一緒に、孤独が僕のことを待ち伏せしているような気持ちになる。

音がないと心細いので、とりあえずという感じでテレビをつけ、そのテレビを点けっぱなしにしたままシャワーを浴びる。風呂から上がると、テレビでは深夜のバラエティ番組がやっていた。しばらくの間僕はそのバラエティ番組を眺めるようにして見ていたのだけれど、やがて退屈になってテレビを消した。

でも、テレビを消したとたんに、僕は落ち着かない気持ちになった。テレビを消した瞬間に、鉛筆で突いた程度の小さな静寂が生まれ、それはたちまち大きく膨張して、部屋のなかから僕の居場所を奪い去っていくような感覚に駆られた。

僕は半ば圧迫感にも似た孤独感を感じて、それを紛らわすために音楽をかけることにした。といって、咄嗟に自分は今何の音楽が聴きたいのかわからなかった。

少し悩んだ末に、僕はふと鞆のなかに今日武田くんに借りたCDが入っていたことを思い出した。武田くんというのは、アルバイト先が一緒の人間だ。僕よりも五つ年下なのだけれど、バンドをやっていたりするせいで、僕なんかよりもずっと音楽に詳しい。

早速鞆のなかからCDを取り出してミニコンポでかけてみると、静かで繊細な感じのする女のひとの歌声が、部屋のなかに優しく流れはじめた。英語の歌詞の歌だった。アルバムのジャケットには、もう既に絶滅してしまった鳥の絵が描かれている。

流れてくる歌声は、降りしきる雨が緑の木々の葉を濡らしていく様子や、雨の日のひっそりと静まり返った海辺を僕に想像させた。どこなく哀しげ感じのする歌声だった。

僕はなんとなくコーヒーが飲みたい気分になったので、廊下と一体化している小さなキッチンに行ってひとりぶんのコーヒーを沸かした。そしてそれを赤いマグカップに注いで部屋に戻ると、音楽に耳を傾けながらゆっくりと飲んだ。

音楽に耳を傾けているうちに、僕はふと、一年程前に和華ちゃんに会ったときのことを思い出した。どうして唐突にそのときのことを思い出したのか自分でもよくわからなかったけれど、思考のなかに浮かびあがったそのときの情景は、逆光のなかで見た景色のように白く霞み、そしてそれは僕の心をほんのり淡い水色の色素に染めていった。

和華ちゃんというのは、僕の大学時代の友人だ。一番最後に彼女に会ったのは、去年のちょうどこれくらいの時期だ。少しずつ冬の寒さが厳しくなりはじめた頃。確か十一月の終わり。友達の結婚式があったときだ。

一年前の十一月下旬、僕は友人の結婚式に出席するために東京から大阪に向かった。移動手段は鈍行電車。なぜ新幹線ではなく鈍行電車なのかというと、それはお金がないからだ。僕はフリーターで（フリーターでもお金に余裕があるひとはいるだろうけど）お金にあまり余裕がない。一人暮らしをしているので、稼いだお金のお半が生活費に消えてしまう。だから、なるべく安い料金で目的地に向かいたかった。

料金の安さという点に関して言えば、夜行バスを使うという手段もなくはなかったのだけれど、でも、僕はなるべく夜行バスには乗りたくなかった。というのは、夜行バスだと席が指定されていて身動きがとれないからだ。あと、休憩のために頻繁にバスが停車するのも気になるかもしれない。僕は眠りが浅い方なので、どうしてもバスが停車するたびに目が覚めてしまうことになるのだ。それから、カーテンが締め切られていて、外の景色を全く見ることができないというのも苦痛だったりする。

極端な言い方をすると、夜行バスはまるで棺桶に詰め込まれて目的地まで運ばれているような気分になる。

その点、電車は常に外の景色を眺めていることができるし、座席

が指定されているわけではないからいくらでも自由が利く。それに乗り換えもあるから、そのたびに新鮮な気持ちになれるというのもいいかもしれない。

とにかく、僕は電車に乗るのが好きだ。電車に乗ってゆっくりのんびりと目的地向かうのが好きだ。その間に色んなことを考えられるし、自分の感情や思考を整理したりすることもできる。それから自分の知らない街や景色を見て、そこで暮らしている無数のひとたちの生活を想像するのも楽しかったりする。

結婚式が終わった次の日、僕は梅田駅で和華ちゃんと待ち合わせた。せっかく大阪まで来たのだから、色々話したいねという話になったのだ。できれば他の友人とも会いたかったのだけれど、次の日が平日だったこともあり予定が合わなかった。

和華ちゃんはそれまで勤めていた会社を辞めていて、だから、比較的に時間には融通が利くみたいだった。今は花屋さんでアルバイトをしていると昨日結婚式で顔を会わせたときに彼女は話していた。

久しぶりに見る大阪駅は大きく様変わりしていた。何もかもが新しく綺麗に整備されていて、僕の知らないビルやお店がいくつもできていた。そのせいか、知っている場所のはずなのに、まるで知らない場所に居るかのような落ち着かない気持ちになった。

僕がほんとうにここで大丈夫なのかなと不安に思いはじめていると、やがて和華ちゃんがやってきた。昨日は気がつかなかったのだけれど、一年ぶりくらい会う和華ちゃんは以前会ったときよりもだ

いぶ大人っぽくなったような印象を受けた。

「おはよう」と、僕は言った。

「おはよう。寒いな」と、和華ちゃんは少し微笑して答えた。

「これからどうする？」と、僕は訊いてみた。

「そうやなあ」と、彼女は呟くように言うと、鞆のなかから携帯電話を取り出して時刻を確かめた。僕も自分の携帯電話を取り出した。見てみると、時刻はまだ午前九時半を少し回ったあたりだった。

「何時の電車で帰るんやったけ？」

と、和華ちゃんは再び携帯電話を鞆のなかにしまいながら言った。
「一時六分の電車。」

「じゃあ、まだもうちょっと時間あるな」

と、和華ちゃんは僕の返答に安心したように頷いた。

「帰りもまた鈍行で帰るの？」

「そうだよ」

と、僕は頷いた。

「大変やなあ」

と、言った和華ちゃんの声は面白がっている感じになっていた。
つられるようにして僕も微笑しながら、

「でも、結構楽しいよ。のんびりできて」

と、言った。

「そうなんや。じゃ、わたしも今度鈍行で東京まで行こうかな」

と、和華ちゃんは冗談めかして答えると、

「どっか行きたいところとかある？」

と、少し改まった口調で尋ねてきた。

でも、急に行きたい場所があるかと訊かれても何も思いつけなかった。それに時間の問題もあった。一時の電車に乗らなければならないのであまり遠出することはできない。僕がそんなことを頭のなかで考えていると、

「とりあえず、ヨドバシカメラに行こうか」

と、和華ちゃんが言った。

ヨドバシカメラは梅田駅の目の前にある大きな家電製品屋だ。

「結構面白いで。色んな新しい電機製品があって」

「じゃあ、そうしようか」

と、僕は和華ちゃんの提案に頷いた。特にこれといって行きたい場所があるわけではなかったので、行く場所はべつにどこだって構わなかった。

まだ午前中だということもあって、訪れたヨトバシカメラはガラガラに空いていた。僕たちはとりあえずという感じで店内に置かれている様々な家電製品を見て回った。なかでも特に興味を惹かれたのは、新しい機種のパソコンだった。

それらの商品は僕が五年程前に買ったパソコンと比べて全くべつの商品のように思えた。当然機能は格段にレベルアップしているし、デザインも一新されていた。僕が買ったデスクトップパソコンはやたらと大きくて不恰好な姿をしているのに対して、最近のパソコンは大きさもいくぶんスマートになり、デザインもほれぼれと見とれてしまうような洗練された形になっていた。

「これで十万円は安いね」

と、僕は特売で売り出されているソニーのパソコンの前で立ち止まって言った。

「僕が持つてるパソコンよりも遙かに性能がいいのに、値段がずつと安いって、何か哀しくなるね」

僕の科白に和華ちゃんは少し可笑しそうに口元を綻ばせると、

「わたし、ちょっと前に新しいパソコン買ったで」

と、得意そうに言った。

「そうなんだ」

と、僕はちよつと驚いて言った。

「でも、和華ちゃん、一台ノートパソコン持ってたよね？」

と、僕が訊くと、和華ちゃんは軽く頷いて、

「そうなんやけどな、前働いていた会社で仕事するのにふたつないと不便でな、だから新しく買ってん」

と、答えた。

「やっぱり薄型の液晶のやつ？」

と、僕が訊くと、

「そうやで」

と、和華ちゃんは当たり前のように頷いた。

「いいなあ」

「じゃあ、吉田くんも新しく買ったらいいねん」

「そんなこと言っても、お金ないからね。フリーターだし。」

「そっか」

と、和華ちゃんは僕の返答に頷くと、何秒間の間何か考えている様子だったけれど、

「吉田くんは就職はせえへんの？」

と、やがて言った。

「そうだね」

と、僕は曖昧に頷いた。

僕はそのことを訊かれるのが苦手だった。というか、嫌いだった。僕が大学を卒業してから就職しないでフリーターでいるのは、小説家になりたいからだだった。もちろん、就職して働きながらも小説を書くことはできるだろうし、実際にそうしているひとがいることも知っているけれど、でも、そうなると書く時間が圧倒的に限られてくるし、僕はどちらかというとき書くペースが遅い方なので、比較的時間にゆとりの持てるフリーターでいたいという気持ちがあった。

しかし、大学を卒業してからもう三年半くらいが経ち、未だに結果が出せていないのだから、そろそろべつの道を模索すべきなのかもしれないなと思ったたりもする……。あるいはきっぱりと小説のことは諦めてしまおうとか。・・そのことはずっと考え続けて今に答えが出せないことだった。いや、単に答えを出すのを先延ばしにしているだけなのかもしれないけれど・・。

そのあと、僕たちはMP3プレーヤーのコーナーを観てまわり、それから、プラズマテレビ等の巨大な液晶テレビを観て回った。欲しいものはたくさんあったけれど、どれもこれも高くて手が出せないものばかりだった。

お金があればな、と、僕は思った。もう少しお金があったらいいのにな、と、切実に思った。べつにこんな高額の商品を買うことはできなくていいから、せめて、たとえば飲食店等に入ったときに、お金のことを気にせずに好きなものが食べられるくらいの贅沢ができればいいのにな、と、思って、妙に哀しいような気持ちになった。

でも、今のお金のない現実を選んだのは自分なのだし、だから、それは仕方のないことだった。それに考えてみれば、僕なんかよりももっともお金がなくて困っているひとたちだっているのだ。だから、そんなことを思うこと自体間違っているかもしれない。でも、そうとわかっていても、心のなかに湧き上がってくる、何か青色の色素を含んだような感情は、どうすることもできなかった。

ヨドバシカメラを出ると、そのあと僕たちはたまたま近くにあったコムサのカフェに入った。どこかにご飯を食べに行っても良かったのだけれど、和華ちゃんがまだお腹は空いていないと言って、僕もついさっきファーストフードを食べてきたばかりだったので、じゃあという話になってカフェに入ることにした。

入ったコムサのカフェはまだお昼時の時間じゃないせいなのか、それとも午前中だからなのか、妙に空いていた。僕たちのほかに客は中年の男のひとがひとりいるくらいのもので、あとはほとんど借し切りといってもいい状態だった。

僕たちは窓際の席を選んで座った。そのカフェは七階にあって、窓からは梅田駅周辺の景色を見渡すことができた。一台の大型トラックが交差点をなかなか左折できずにいた。歩道を歩く人たちは圧倒的にサラリーマンのひとが多くて、だいたいひとがポケットに両手を突っ込んで寒そうに顔をしかめながら歩いていた。

やがて、僕たちと同じ年くらいのウェイトレスがオーダーを取りに来て、僕はコーヒーを注文し、和華ちゃんは紅茶とリンゴのケーキを注文した。

店内には押さえたボリュームで雅楽をオシャレな感じに編曲したような音楽が流れていた。店内は陶器の白色を思わせる色調で統一されていて、壁には歌舞伎役者の絵をちよつとモダンな感じにしたような絵が描かれていた。

間もなくすると注文した飲み物とケーキが運ばれてきた。僕たち

はおのおのに飲み物やケーキを食べながら話をした。でも、どちらかというとあまり会話は弾まなかった。沈黙の間にポツンポツンと言葉を置いていく感じだった。

気のせいかな、向かい合わせに座った和華ちゃん表情は少し沈んで見えた。親しかった友人が結婚してしまったことで、その友人を失ってしまったような気持ちになっているのだろうか、と、僕は考えてみたけれど、口に出しては何も訊かなかった。

「昨日、かよちゃん、きれいやったよな」

と、何回目かの沈黙のあと、和華ちゃんは口を開いて言った。

「そうだね」

と、僕は曖昧に微笑して頷いた。かよちゃんというのは、昨日結婚式をあげたばかりの女友達のことだ。かよちゃんとも大学時代に知り合って仲良くなった。

「まさかかよちゃんが一番最初に結婚するとは思わなかったけどね」と、僕は少し笑って言った。すると、つられるようにして和華ちゃんも口元を綻ばせると、「そうやな」と、同意した。

「でも、あのかよちゃんがお母さんになるなんて信じられへんよな」と、和華ちゃんはしみじみとした口調で言った。

「そうだね」と、僕は頷いた。

僕は彼女が自分の子供を抱いているところを想像しようとしてみたのだけれど、上手くいかなかった。

ふと、飛行機が通り過ぎてく音が聞こえてきて、僕は窓の方に視線を向けてみた。和華ちゃんもつられるようにして窓の外に目を向けた。飛行機は空のかなり低い場所を飛んでいて、その姿をくつきりと見て取ることができた。天気は良く晴れていて、色素の薄い優しい水色をした空には、小さな雲がポツンポツンと間隔をあけて浮

かんでいた。

「・・・なんかどんどん変わってってしまうな」

と、和華ちゃんは飛行機が見えなくなってしまったから静かな声で言った。僕は彼女の方に注意を戻して、コーヒーを一口飲んだ。

「まだまだ子供の気分やったけど、でも、それぞれ就職して社会人になって、結婚とかしたりして・・・これからもどんどん変わっていつてしまうんやね」

そう言った彼女の声は、少し哀しげに響いた。それはパチパチと小さく静かに燃えて夜に闇のなかに吸い込まれるようにして散ってしまった夏の線香花火を僕に連想させた。

「でも、変わっていくことのなかにもいいことはあるしね。たとえば昨日のかちゃんとの結婚式だってそうだし・」

と、僕は少し考えてから答えた。

すると、彼女は僕の言葉に何秒間の間黙っていたけれど、やがて、「・・・そうやけど。でも、ときどき寂しくなってしまうな。」と、独り言を言うように小さな声で言った。「なんて言ったらいいのかわからへんけど、すごく遠くまでできてしまったような気持ちになる」

「遠くまで？」と、僕は手にしていたコーヒークップをソーサーの上に戻してから和華ちゃんの顔を見つめた。

「なんかわたしのなかではな、みんなと大学の頃過ごした時間とか場所が原点みたいになくなってな・・・だからな、どんどんその場所から遠のいていってしまったと思うとな、ちょっと寂しくなるねん。もう二度とあのときには戻れないんやなって思っ」

「・・・そっか」と、僕はと言ったらいいかかわからなくて曖昧に頷いた。

「でも、確かにときどき寂しくなることはあるよね。」と、僕はコーヒーカップのなかに視線を落としてから和華ちゃんの科白に同意するでもなく言った。「みんなそれぞれ環境とか立場が違ってきちゃうし、みんなに会える日もどんどん少なくなってきたる気がするし・・・でも、それはしょうがないことなんだろうけど、だけど、とぎとき懐かしくなるよね」

と、僕は言った。

「吉田くんにこの前あったのもだいぶ前やよなあ」

と、和華ちゃんはふと思いついたように小さく微笑して言った。

「そういえばそうだよな」と、僕もつられるようにして微笑して言った。

「確か去年の冬やったよな。」と、和華ちゃんは言った。「わたしが東京まで遊びにいったんよな」

「そうだね」と、僕は言った。

「あれからもう一年が経つなんて信じられへんよな」

と、和華ちゃんは言った。

「あれからどう？」と、僕は顔をあげて和華ちゃんの顔を見つめると、ちよつと躊躇ってから尋ねてみた。「藤井くんのこととはもう忘れられた？」

そう言った僕の言葉に、和華ちゃんの表情は一瞬動きを停止してしまったような気がした。まるでビデオの静止画面みたいに。そして少ししてから再びまた和華ちゃんの表情は動きだした。

「うん。もう大丈夫やで」

と、和華ちゃんはいくらかきこちなく微笑して答えた。でも、その口元に浮かぶ微笑みには悲しみが淡く透けて見えるような気がした。

一年前の冬、和華ちゃんが東京まで遊びに来たとき、彼女は約四年半付き合った恋人と別れたばかりだった。そしてその事実は彼女を傷つけ、ひどく消耗させていた。だけど、それもそのはずだった。本来であれば彼女はその恋人と結婚していたはずだったのだから。

「・・・あのときはだいぶ感情が不安定になってしまってたけど、もう今は大丈夫。あんまり思い出したりしんくなってきた」

「・・・そっか。だったらいいんだけど」
と、僕はちよつと余計なことを訊いてしまったかなと後悔しながら頷いた。

「吉田くんはどうなん？」

と、僅かな沈黙のあと、和華ちゃんはからかうような口調で尋ねてきた。

僕は苦笑して首を振った。

「一回片思いみたいなのはあったけどね・・・でも、だめだった」

「・・・そっか」

和華ちゃんはどこかいたわるような眼差しを僕の顔に向けた。

「お互いなかなか上手くいかけんな。」

と、和華ちゃんは言って、小さく笑った。

「そうだね」

と、僕は同意して軽く笑った。

窓から差し込む透き通った冬の日の光が、和華ちゃんの顔を遠慮がちに輝かせていた。

「小説は書いているの？」

と、和華ちゃんは少し間を置いてから言った。

「うん。ぼちぼち書いてるよ」

と、僕は答えてから、ちょっと照れ臭くなって笑った。

「前、賞取ったって言ってたよな。あれからどうなったん？執筆の依頼とかは来るようになったの？」

僕は和華ちゃんの問いに苦笑するように微笑んで首を振った。

「賞を取ったって言っても地方の小さな賞だしね。だから・・・そういうのはないかな。」

「・・・そっか。なかなか難しいんやね」

と、和華ちゃんはどうか答えたらしいのかわからないように小さな声で言った。

「でも、まだ書いてるんやろ？」

と、五秒間程間隔をあけてから、和華ちゃんは言った。それは僕を励ますためというよりは、何かを繋ぎとめようとするような響きがあった。

「うん。一応書いてることは書いてるよ」と、僕は答えた。

「今はどんな話を書いているの？」

「今は花の話を書いてるよ」と、僕は答えた。

「花の話？」

「そう。一応、和華ちゃんがモデルなんだけどね」

と、僕は曖昧に微笑んで言った。

「そうなんや」と、和華ちゃんは笑って頷くと、

「なんか自分がモデルなんてちょっと恥ずかしいな」

と、和華ちゃんは笑いながら言った。

僕は彼女に誘われるようにして微笑すると、

「でも悪いようには書かないから。なんか自分で言うのもあれだけど、今回の小説はいい小説になりそうな予感がしてる」

「そっか。頑張ってたな」

と、和華ちゃんは優しく微笑んで言った。

もう、あれから一年が経ってしまったんだな、と、思った。あの日、和華ちゃんの顔を静かに照らしていた冬の日の光が、何故か印象深く僕の心のなかには残っていた。

考え事をしているうちにいつの間にかミニコンポはCDの一番最後の曲を流しはじめていた。その曲は、それまでの曲のなかでも一際哀感を帯び、それでいてとても穏やかな感じのする曲だった。

たとえばそれは子供のときに海に潜って水中から太陽の光を見つけたときのことや、やわらかな雨が花を咲かせるように海面に波紋を描いていく様子を僕に連想させた。それはまだ哀しみという形に姿を留めながら、でも、新しい何かへと生まれ変わっていきこうとしている想いのようなものを僕に感じさせた。

CDのジャケットに同封されている歌詞カードを見てみると、今流れている歌の曲名は「冬の花」という題名の歌であるようだった。僕は流れている歌に耳を澄ませながら、日本語に訳された歌詞を辿ってみた。

窓の外には雪が静かに降っていて

それは夜の闇を白く塗りつぶしていくように思える

きつと気がついた頃には全てを雪がやわらかく包んでくれている

あなたと伴に過ごした時間も話したことも全てみんな

時の流れがわたしとあなたの距離を遠ざけてしまった

こんな結末なんてわたしもあなたも望んでいなかったけれど
でも仕方がないのよね

これ以上無理をしてもお互いに疲れきってしまうだけなのはわかり
きっているから

わたしたちは歩み寄ろうと十分努力した
だからもうこれでいいのよね

人生には選りよないこともある

わたしたちは離れることでお互いに優しくなれるの
きつと離れることでいつまでもお互いの存在を尊重し合えるの

そう これでいいのよ

わたしたちが出会ったことを無駄にしないためにはこうするしかな
かったの

今娘は暖炉の前でうとうとしてる

今朝雪が積もったのが嬉しくてはしゃぎすぎたみたいね

今娘が着ている服はこの前あなたがあの子の誕生日に送ってくれた
花柄のパジャマ

あの子はあなたが送ってくれたパジャマがお気に入りみたい

淡い青色の花がプリントされたパジャマ

今日は雪が降っているからさしずめ冬の花っていうところかしら

まだまだ雪は降り止みそうにないみたい

きつと雪は朝まで静かに降り続けるでしょう

そう とても静かに

歌詞カードの最後のページには、このミュージシャンの経歴が簡単に説明されていた。

メアリー・ロレンス。現在三十二歳。カナダ生まれ。父親はほとんど無名だがロックバンドのボーカルだった。母親はクラシックピアノの先生。彼女が生まれて間もなく、父親は薬物中毒になり、その後ピストル自殺した。

彼女は母親に女手ひとつで育てられるが、その母親も彼女が十六歳のときに病気で亡くなる。その後、彼女はミュージシャンになることを目指し、ギターを片手に路上で歌を歌い続ける。

二十二歳のときにCDデビュー。二十六歳のときに結婚。相手は彼女のCDデビューを手がけたプロデューサー。一女をもうけるが、三十歳のときに離婚。離婚後も精力的に活動を続ける。アルバムに「冬の花」「りんご」「夜の月」等がある。哀しげな旋律のなかに静かな優しさを感じさせる歌声が特徴的である。

僕はCDの最後の曲が部屋の冷たい空気のなかに吸い込まれるようにして消えてしまうと、それまで座っていたソファアの上から立ち上がった。

もう疲れたし、寝てしまおうと思った。また明日はバイトがある。

僕は浴室に行って歯を磨くと、部屋の電気を消した。電気を消すと、部屋のなかは真っ暗になった。しかし間もなくすると、次第に

目が慣れてきて、それが完全な暗闇ではなくて、月の光がほのかに溶けたやわらかな闇であることに気がついた。僕はカーテンを少し開けて、夜空に浮かぶ月の姿を探した。

月は西の空のやや傾いた場所にひっそりと輝いていた。満月ではなく、小さな三日月だった。そのレモン色の優しい光は網膜を通して僕の意識の深い場所に届き、それは僕の心の一番やわらかい場所をそっと震わせて行った。僕はずっと遠く昔の何かを思い出しそうになったけれど、でも、結局何も思い出せないままに終わった。ただ、何かがひっかかっている感触だけが残った。

僕は再びカーテンを閉じると、ロフトに上がって布団の上に横になった。瞼を閉じるとすぐに意識の上から眠りが広がってくるのがわかった。

和華ちゃんをモデルにした小説は結局完成しなかった。書いている途中でそれまで自分が書こうとしていたことがよくわからなくなってしまったのだ。まるで水に濡れてしまった水彩画のように。色が滲んでしまっではじめの形がわからなくなってしまったのだ。

また今度頑張ってちゃんと小説を最後まで書き上げなくちゃな、と僕は思った。そしてできるならその話には希望があった方がいいと思った。その物語を読み終えたひとが、ほんのわずかでも勇気付けられたり、前向きな気持ちになることができる小説。

そうだ。今度は冬の花について書こうと思った。和華ちゃんが冬の花を育てる話。

冬の花は育てるのが難しくてなかなか花が咲かないのだけれど、でも、最後、透き通るようにきれいな水色の花がそっと静かに咲く・

・そんな話が書けたらいいなと僕は願うように思った。

「またね」と、和華ちゃんは言った。

「また今度東京にも遊びにきてよ」と、僕は言った。

「そうやね。また時間できたらいくわ」と、和華ちゃんは微笑んで言った。

あの日、友人の結婚式の翌日、和華ちゃんとは梅田駅の改札の前で別れた。

そのあと僕は再び鈍行電車に乗ってひとり東京まで戻った。

大阪を出で名古屋を過ぎたあたりから急に天気は崩れはじめて、静岡に入った頃には雨が降り始めた。それは激しくも降らなければ弱くも降らない淡々とした雨だった。雨は暗い電車の窓ガラスに線を引くように流れていった。

あの結婚式があった日から、和華ちゃんにも他の友達にも会っていない。みんな今頃どうしているのだろうと思う。元気にしているのだろうか。またいつの日かみんなに会いたいな、と、僕は思う。

身体が疲れていたのか、やがていつもよりも深い眠りが僕の意識を包み込んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9307o/>

冬の花

2010年11月16日15時02分発行